ONE PIECE ～正義のために～

黒風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　～正義のために～

【Ｎコード】
Ｎ３７３３Ｎ

【作者名】
黒風

【あらすじ】
ある日、一つの国が歴史から消えた。
その国の生き残りは、皆のため、仲間のため、己のために一つの道を突き進み、「平和な世界」を目指す。

プロローグ（前書き）

勢いで書きました。

他のやつも全然なのに・・・・

文才は・・・察して下さい。

プロローグ

―海軍本部―

「あ奴らのことはどうするつもりじゃ？センゴク」

「とりあえず賞金は額をあげるが、それもあまり効果はないだろう」

「ん～、そもそも彼らはわっしらには危害を加えていないからね～」

「じゃからとゆうて野放しというわけにもいかんじゃろ？」

「これじゃ七武海の件も無くなりそうだしね」

「・・・・・・」

ここは海軍本部、元帥センゴクの部屋。

そこにはセンゴクの他にかの三大将と中将のつる、ガープが居る。

「確かに海軍に直接敵対している訳ではないが、今回の件はそういう問題ではない」

センゴクは今回の事件を振り返っていた。

今回の事件―

かつて冒険家、フィッシャータイガーが起こした聖地マリージョア

への侵入及び奴隷解放。

あの事件から十年。

聖地マリージョアへの侵入が再び成された。

そこに侵入したのは、わずか七人。

しかし、そのたった七人に、マリージョアは壊滅させられた。

その七人の目的は”奴隷解放”と”天竜人の殲滅”。

天竜人は過半数が殺害され、奴隷たちも八割以上が逃げ出した。

そしてその場において、海軍の死傷者は”ゼロ”。

海兵を一人も死なせることなく、七人は目的を果たし、そして逃げ去った。

海軍としても、海兵に死者が居なかったのは喜ばしいことであり、天竜人が死んだことも、そこまでは気にしていない。

しかし、政府は恐れている。

一人も死者を出すことなく、目的を完遂した彼らを。

これがいざ敵に回ったら、海軍などあっという間に壊滅だろう。

そもそも政府が七武海に勧誘しようとしたような男とその仲間だ。

敵に回したく無いに決まっている。

「どうしたものか・・・我々としても、敵対はしたく無いのだが、ことがことだけにのぅ・・・」

「わしの能力も効かんかったし、できれば戦いたくないもんじゃがのぅ？」

そう言ったのは海軍大将サカズキ。彼はこの戦いで、敵の大将に敗北したのだ。しかも、圧倒的な差で。

「サカズキが大敗するとは、もう手がつけられんのではないか？」

そこで、英雄ガープが口を挟んだ。

「奴は昔から才能があり、己の思想に真っ直ぐな男じゃ。大方、天竜人の行為が許せんかったんじゃろう」

ガープとこの事件の首謀者は、数年来の付き合いがあり、このなかでは誰よりもその男について知っている。

「だとしても、政府としてこの事件を黙認することはできん。しかし、我々が敵わない以上、出来ることは懸賞金によって危険性を示すことぐらいだ」

そういってセンゴクは電伝虫に手を伸ばした。

数日後、グランドラインのとある海。

「船長。これで解放した奴隷たちは最後になります」

「分かった。それじゃあ、安全な島まで無事送り届けてくれ」

「はっ、かしこまりました」

そういって、男は部屋を出ていった。

そしてもう一人の男—船長は、今日の新聞に手を伸ばす。

新聞を開くと、同時に何枚かの手配書が落ちてきた。

それを読んで呟く。

「やっぱりこうなっちまったか。まぁ仕方が無い。これも俺が選んだ道だ」

そこには先日マリージョアを襲撃した七人の手配書。

そしてそのうちの一枚はその男のもの。

ノクターン・D・ラルス

『天帝のラルス』

7億2000万ベリー

これがこの物語の主人公だ。

プロローグ（後書き）

感想やら評価やらダメだしやら。

なんなりと下さい。

EPISODE　1（前書き）

なんか詰め込みすぎ・・・

EPISODE　1

数年前。

グランドラインのとある王国。

その国は小さいながらも、人々は活気に溢れていた。

「父上、何か御用でしょうか？」

「おぉ、ラルスか。実はのぅ、お前の王位継承式の話しなんだが・・・」

そこでは王と少年が向かい合っている。

青年の名はノクターン・D・ラルス。この国の国王の息子、つまりは時期国王だ。

ラルスは今１８歳。正式に王位を継承する歳だ。

今は現国王から、明日の継承式の話しが行われている。

「・・・とまぁ、堅苦しい話しはこれで終わりだ。これからは王として忙しくなるのだから、少し街でのんびりしてこい」

「わかりました。それでは失礼いたします」

ラルスは部屋を出ていった。

ところ代わって城下街。

「待て～！！」

「ハッハッハ！つかまえられるものならつかまえてみろ！」

ラルスは現在、街の子供たちと追いかけっこをしている。

１８の青年が、１０にも満たない子供たちから全力で逃げるのはいささか大人気ない気もするが・・・

「捕まえた～！次はラル兄がおに～」

「ま、待った。す、少し休ませてくれ・・・」

半日も休まず逃げていれば、それは疲れるだろう。

「こら、あんたたち！ラルス様を困らせるんじゃないよ！」

子供たちの親が子供たちを叱る。

「ご、ごめんなさい・・・」

「気にすんな。俺が好きでやってるんだから。それよりおばさんも、様付けはやめて下さいよ」

「いえいえ、明日から国王となるお方ですから。本来ならば、こうしてお話するだけでも恐れ多いのに・・・」

「そんなこと、気にしちゃいませんよ。もっと柔らかく、フレンドリーにお願いしますよ」

わかりました。というおばさんと子供たちに別れを告げ、ある場所へと向かう。

「いらっしゃい・・・ってなんだラルス君か。あ、もうラルス様かな？」

「よしてくれよ、クレア。幼なじみに様付けなんてさ。それに俺は、そんな様付けされるような凄い人間じゃないんだから」

ここは幼なじみのクレアの両親が経営する酒場。

ラルスはここに、昼食をとりに来た。

「（いや、ラルス君が凄くなかったら、一体どれほどのことをすればいいの・・・）」

実際ラルスは大した人物だ。

１０歳から政治を学び、僅か一年で他国と外交を出来るほどに成長した。そして多くの国と同盟を組み、小国ながらも王国の名を世界に轟かせた。

また、民衆からの支持も厚く、王として素晴らしい器を持っている。

さらに言えば武術も大したもので、海軍の将官に教わって”六式”と言われる戦闘方法を身につけ、曰く准将ほどの実力はあるらしい。

「とにかく、メシ食わせてくれ」

「わかったよ。ちょっと待ってて」

待つこと数分。

「お待たせ」

料理が運ばれて来た。

「いただきま～す！」そういって食事を始める。
ラルスはカウンターで、向かいにはクレアがいる。

「やっぱクレアのメシは美味いな。なんか、こう、落ち着く味だな」

「そ、そう！？／／／あ、ありがと・・・」

料理を褒められて、照れるクレア。

クレアの料理は一言で言えば「超家庭の味」だ。

王族でありながらラルスは、城で出るような固っ苦しい料理が苦手で、クレアや街の人達がつくる家庭の味が大好きだ。

なのでラルスは何も無ければ基本、街に食事をしにくる。

「ラルス君も明日から国王か～。ちゃんと様付けしなきゃなぁ～」

「やめてくれよ。いくら王位継承したって、幼なじみってのは変わらないんだから」

「そういう訳にもいかないの」

「じゃあ国王命令。俺への様付けを禁ずる」

「権力の乱用・・・」

「冗談だって！・・・でもマジで様付けはやめてくれ！頼む！」

「わかりましたよ。ラ・ル・ス・さ・ま♪」

「お前なぁ～」

「冗談だって♪」

二人のやり取りはしばらく続いた。

そして翌日。

「ノクターン・D・ラルス。これを持って汝を国王に任命する」

現在、ラルスは城で継承式を受けている。

そして式も終わりさぁ宴だ！という時にそれは起こった。

ドカンッ！！

「な、なんだ！？」

突然大砲のような音がして、人々の叫び声が聞こえる。

「た、大変です！海軍からの砲撃を受けています！！」

「何だって！？」

理解が出来ない。なぜこの国が海軍に狙われるのか。

「と、とにかくお逃げ下さい！・・・！！ラ、ラルス様、何処へ！？」

ラルスは街へと駆け出していた。

「（みんな・・・クレア、無事でいてくれ！）」

「な、なんだこれは・・・！」

街は火に包まれ、街人は海軍に襲われていた。

そして今、小さな子供が海兵に斬られようとしている。

「くそっ、剃！」

一気に間合いを詰める。

「鉄塊、崩！」

鉄のように固めた拳を腹に叩き込む。

「！！？」

声もあげずに海兵は吹き飛んだ。

「早く逃げろ！！」

子供に向けて叫んだ後、ラルスは一直線に駆け出す。

「クレア！無事・・・っくそっ！」

ラルスは再び拳を突き出す。

「クレア、大丈夫か！？」

「ラ、ラルス君？私は大丈夫だけど、お父さんとお母さんが・・・」

辺りを見回すと、クレアの両親はすでに息絶えていた。

「グスッ、お父さん、お母さん・・・」

クレアは泣き出した。

無理もない。目の前で両親が殺されたのだ。

しかし、

「クレア、悲しむのは逃げ出してからだ。ご両親の為にも、今は生きることを考えろ！」

そう言って、ラルスはクレアを抱えて走り出した。

しかしその道中、

「！？何者だ！」

「俺は海軍本部中将のウォルス。悪いがここで死んでもらう！」

「クレア、下がってろ！この野郎！！」

二人の拳がぶつかり合う。

そしてラルスは弾かれる。

「ぐあっ！！」

「一般人の割にはやるようだな・・・だがしかし、ここまでだ！」

「なぜだ、なぜこの国を狙う！？」

「・・・いいだろう、冥土の土産に教えてやる。この国は短い期間で、急速に力を付けた。小国とはいえ、ここまで急激な発展を遂げる国は危険だ、という判断で、この国に”バスターコール”がかけられた。これ程の力を持った者が敵に回れば、政府としては危険だからな」

そんなことで？

ラルスは憤りを感じた。

「ふざけんじゃねぇ！！そんな僅かな可能性の為にこの国の人々を殺したってのか！？急速に力を付けたから潰す？ふざけんな！！国民と、みんなとただ国を営むことが罪だってのか！？」

「それが政府の決断だ。最早覆ることはない。潔く死ね！！」

中将の拳がラルスに命中した。

と、思った。

「！？お前、まさか・・・」

拳が当たったと思ったその場所は、確かに腹があるべき場所だが、そこは何も無い空間となっていた。

「お前、まさか自然系（ロギア）悪魔の実の・・・」

「許さねぇ・・・お前は殺す！！覚悟しろ！！！」

その瞬間、中将の周りの空気が圧縮されていった。

「大気の圧縮（エアー・ド・プレス）」

中将は形を留めることなく、空気に潰された。

「・・・！！クレア、大丈夫か！？」

クレアは顔面蒼白である。

「ラルス君、今のは一体・・・」

「今まで黙ってて悪かったな。俺は悪魔の実の能力者なんだ。自然系悪魔の実、”エアエアの実”の”空気人間”。それよりも、早く

逃げるぞ！！」

ラルスは今までクレアはおろか、両親にも、悪魔の実のことは話していなかった。こんな力を持っていることで、嫌われたくなかったからだ。

しかし、ばれてしまっては仕方が無い。

ラルスはクレアを抱えて、空を翔けていた。

そして救助船のもとまでたどり着いた。

しかしその時、救助船は、砲撃を受けて沈んだ。

そして他の船も。

ラルスの能力なら空を飛んで逃げることも出来るが、この国は他の島とはかなりの距離があり、そんな距離を人一人抱えて飛べる程の自信は無かった。

「くそっ！・・・万事休すか・・・」

その時、近くの茂みから、男が現れた。

「久しぶりじゃの、ラルス」

「・・・ガープさん・・・」

目の前には海軍の英雄、ガープが立っていた。

「あんたたち海軍のせいで・・・みんなが・・・」

ラルスは怒りをあらわにして、震えていた。

「あんたたち海軍のせいで、この国の平穏は崩れた！そして罪もない人達の命が奪われた！それもほんの僅かな可能性のせいで！みんな、みんな死んだんだ！海軍は人々を守る為のものじゃねぇのかよ！」

ラルスは涙ながらに、怒りをぶつけた。

「すまなかった」

ガープは短く言った。

すまなかった？

あれだけの人を殺して、たったそれだけ？

「ふざけんじゃねぇ！謝って済むようなことじゃねぇんだよ！」

ラルスの怒りは更に膨らんでいく。

「好きなだけ罵れ。これは止めることのできなかった儂らの責任じゃ。そんなことで許されるとは思っておらん」

ガープは更に続ける。

「島の裏に、船を用意しておる。それに乗って、お前たちだけでも生きろ。それが儂にできる、せめてもの償いじゃ。表では今、クザ

ンが中心となっておるから、裏には注意が行かんはずじゃ」

しかし、ラルスの怒りは納まらない。

「ふざ「ラルス君、もう行こう？」っ！？クレア！？お前はそれでいいのか！？」

「ガープさんの目をよく見てあげて」

ラルスは言われた通りにする。

国の代表として、様々な交渉をしてきたラルスは、たいていのことは、目を見ればわかる。なので、ガープの目を見てすぐわかった。後悔の念で一杯だということが。

「・・・わかりました。ここは言う通りにします。・・・だけど俺はいつか、海軍に復讐する！そのときは、いくらガープさんといえど、容赦はしない！」

そう言って、ラルスは島の裏へ駆け出した。

「ラルス・・・まさか中将を倒す程の実力とは。あいつはこれからの時代を担っていけるようなやつじゃ。しかし、海軍に復讐か。もしかしたら、ドラゴンと同じ道を辿るかもしれんな」

ガープの独白は、夜空へと消えていった。

そして数日後、手配書が出された。

ノクターン・Ｄ・ラルス
『天帝のラルス』
１億３０００万ベリー。

EPISODE　1（後書き）

感想待ってます。

第1話（前書き）

時系列は原作の大体一年前ぐらいです。

第1話

「あれからもう五年か・・・」

ラルスは船の甲板で、海を見ながら呟いた。

「ラルス君、何黄昏れてんの？」

後ろを振り返ると、クレアが居た。

「ああ。初めて自分の手配書が出たときのことを思い出してな」

「・・・そっか・・・」

あれから五年。ラルスは自身が掲げた「海軍への復讐」という目的は、すでに捨てた。

あの頃は海軍の全てを憎み、がむしゃらに支部を潰していた。

そして調べているうちに、あの事件の事実が判明した。

あの時のバスターコールのを発令したのは、ラルスがあの時仕留めた中将と中将がもう二人。そしてその三人を金で買収したとある国の王侯貴族だった。

どうやらラルスの父親に怨みがあったらしく、そのような暴挙にでたらしい。

ラルスは真実を知るやいなや、中将二人と貴族を仕留めに向かい、

見事完遂した。

そのせいで懸賞金はまた1億ほど増えたが・・・

そしてあの事件の時、ガープとクザンは他の中将達から人々を守る為に同行したらしいが、思うように動けず、結局逃げ出せたのはラルス達二人だけらしい。

あの時に散々言ったことをガープに謝りに行ったら、「だったら大人しく捕まれ」と言われたので、全速力で逃げてきた。

一応クザンにも礼を言いに行ったら、「じゃあ仕事をサボる時匿って」と言われたので、苦笑しながらも了承した。

海軍のトップが賞金首の船に逃げてくるのも、何ともおかしな話だが。

その時ついでに、ロギアの扱い方についても学んだ。

「・・・やっぱり引きずってる？」

「引きずってるというか・・・取り合えず忘れないようにはしている。俺達が忘れたら、あの国の人達は、生きていた、ということが否定されちまう。バスターコールで地図からも消された国の人なんて、誰の記憶にも残らない。そして俺達は、みんなの命を背負って生きている。だから俺達は、忘れちゃいけないんだ」

「そう・・・だよね」

哀愁漂う表情で話すラルスの言葉を聞いて、クレアの表情もやや曇るが、すぐにいつもの笑顔に戻って、

「ご飯出来てるから、早く来てね」

と言って、食堂へと向かって行った。

ラルスは再び海を見ながら、過去を振り返る。

自分の国の復讐を果たし、ラルスは目的を失った。

しかしそこで、新たな決意が産まれた。

それは、人々に平穏をもたらすこと。

今の「大海賊時代」。民間人が海賊に襲われるのは日常の出来事だ。

更に海賊だけでなく、私利私欲の為に動く海兵や、独裁政治を行う王族や貴族。そして極めつけは「天竜人」だ。

あんな人を人とも思わない奴らを、生かしておくわけにはいかない。

だからラルス達はマリージョアの乗り込み、天竜人を狙った。

あくまで狙いは天竜人なので、海兵は死なすことなく全てを終えた。

そして解放した奴隷達は今日で全て帰って行った。

家族が居る人は自分の家へ。
家族が居てもそこに住むことを恐れる者や、身寄りの無いものは、信頼の置ける国王や貴族、そして平和な島へと送り届けた。
ちなみに奴隷の中にいた血気盛んな海賊達は、全員ぶちのめして、解放された人々の護衛や、傘下の海賊達に預けた。
「もし何か問題を起こしたら殺す」と殺気を込めた脅しをかけたので、大丈夫だろう。

五年間、人々の平和な生活の為に動いて来た。
それを後悔したことは無い。
掛け替えの無い仲間も出来た。
人数は少なくとも、戦力としては、世界とも戦えるほどだ。
ラルスは、自分の正義を邪魔する者は海賊だろうと、海軍だろうと、貴族だろうと潰して来た。
それはこれからも変わらない。
ただ自分の正義の為に動く。
それがラルスの、ラルスの仲間達の信念だから。

「やってやるさ。必ず平和を創りあげてやる」

呟きを残して、ラルスは食堂へと向かった。

第1話（後書き）

ご意見、ご感想、その他諸々お待ちしております。

第2話（前書き）

とりあえずクルー全員の名前を出しました。

今回は特に内容は無いです。

第2話

ラルスは食堂へとやって来た。

「ラルス遅〜い。お腹減った〜」

「悪いな。少し考え事してて」

「別に構わねぇけど、飯の時間ぐらいは守れよ。みんなに迷惑だ」

「だから悪かったって」

ラルスはクルーから非難を浴びた。

「早く食べよ〜。もう待てない・・・」

さっきから急かして居るのは、この船で”航海士”を勤めている女性、カレン。

この船のクルー七人の中では最年少となる。

「カレン、落ち着いて下さい。はしたないですよ?」

カレンへと注意したのは、この船で”狙撃手”を担う男フィル。

とても落ち着いて、紳士的な人物だ。

「ぶ〜」

拗ねるカレン。

「そう言うなって、フィル。悪いのは俺だし」

「そうそう。悪いのはコイツだ。カレンの言う通り、早く食おうぜ」

「ガイル、お前な・・・」

今のはこの船の”船医”兼”副船長”のガイル。

厳つい見た目をしているが、かなりの好人物。

ラルスに対して悪態をつくが、ただからかっているだけで、別に他意はない。

「とにかく早く食べようよ。冷めちゃうよ？」

今のはエルザ。この船のクルーで、人間ではなく”魚人”。

エンゼルフィッシュの魚人で、役職的なものは特に無い。

「そうだな。いつまでも争っていたら、せっかくのクレアの料理が勿体ない」

そしてこの船のもう一人の魚人、ジャックが口を開く。

ホオジロザメの魚人で、この船最年長の”船大工”。

最年長故に、みんなのまとめ役。

「そうだよ。早く食べてよ」
クレアも言う。
「よし、じゃあ食うか」
「「「「「「「いただきます」」」」」」」
これがラルスを含めた七人の海賊団、”ディオス海賊団”。
今日も彼等の一日が始まる。

第2話（後書き）

キャラ紹介は区切りがついたらしようと思います。

能力とかは一応は決めてますが、「こんなのがあったらいい」みたいなのがありましたら、案をお願いします（悪魔の実や武器、戦闘法など）。

何も無ければ、変更無しでいきます。

第3話（前書き）

みー訓様よりご指摘を頂き、［第０話］を［ＥＰＩＳＯＤＥ　１］と改めました。

これからは、過去編みたいなものを、ＥＰＩＳＯＤＥとして扱っていきます。

第3話

現在、朝食中。

「そういえば今朝の新聞読んだか？この間のことが載ってたぞ」

「ああ、一応目は通した。大分派手に載ってたな」

「いや、あれだけのことをすれば、そりゃあ載るでしょ？」

「いや、普通だったら、政府は”海賊にしてやられた”なんて事件は隠蔽するはずだ。それが今回に限って公表されたのは、どうにも腑に落ちん」

「確かにそれは一理あるね。まあ、そんなことをしでかした訳だから、みんな懸賞金があがってるけどね」

「そうだね。ついに私も億越えしちゃったし」

「ああ。今回のことでとうとう一味全員が億越えした訳だ」

ラルス達一同は、聖地マリージョア襲撃事件について、海軍本部が発表した情報を吟味している。

「しかし、ラルスの懸賞金は一体何だ？普通人一人にかける額じゃねぇぞ？」

「ガイルだって大して変わんねぇだろ？今更気にすべきことでも無

いし」

「そうですよ？この程度で気にしていては、身がもちませんよ」

「いや、結構な問題なんだけど・・・」

なんとも呑気な海賊達である。

自分達が行った世界的大事件を、朝食時の他愛ない会話としているのだから。

「今更気にしたって、何も変わんねぇだろ？それよりもクレア、おかわり」

「あ、俺も」

「私も～」

「はいはい。ちょっと待っててね？」

ラルス、ガイル、カレンは二杯目へ。

そして朝食も終わり、各々思い思いの時間を過ごしていた。

その時、

チリンチリン

突然、自転車のベルのような音がした。

「ん？こんな海のド真ん中で自転車か？一体どこのどいつだ？」

「そんなことが出来る人は、一人しか居ないでしょ？」

「だろうな。ベルを鳴らしたってことは、捕まえに来た訳じゃなさそうだな」

そして自転車の訪問者、海軍大将、青雉ことクザンが甲板に登って来た。

「やあ。お早う」

「・・・一応海軍だよな？そんなんでいいのか？」

間の抜けた挨拶に、ガイルが突っ込む。

「問題無いっしょ。俺はお前達に敵対する気無いし。ただ世間話と、情報交換しに来ただけだから」

青雉は飄々と応える。

ラルス達一味は、民間人に危害を加えるものは海賊だろうと、海軍だろうと、貴族だろうと、容赦せずに潰す。

青雉を含めた、ラルス達と面識を持つ何名かの海軍は、自分達では同じ海軍や王侯貴族には手出しが出来ないため、ラルス達に圧政や悪政、海兵と海賊が不正な関係を持っている等の情報を流し、そういったものを撲滅するための依頼を出している。

ここで発生する協定も、不正な繋がりではあるが、多くの人の平和をもたらすために、海軍も成り振り構ってはいられないのである。

「にしてもお前さんら、この間のはちとやり過ぎじゃないのかい？」

「天竜人がいくら死のうが、海軍には影響無いだろ？」

「第一あんな奴らを生かしておいても、なんの意味も無い」

「実際に私達のした行動は、別に平和を侵した訳じゃ無いでしょ？」

口々に言われて、青雉はため息をつく。

「・・・そりゃあお前さん達のしたことは海軍に何一つ不利益を産んじゃいない。海兵は誰ひとり死んじゃいないしな。・・・ただ、この件で俺達の計画の一つが崩されてな・・・」

「計画？」

「ああ。実はこれは極秘事項なんだが・・・」

全員が息を呑む。

「・・・実は、七武海に空きが出来しだい、ラルス。政府はお前を

任命しようとしていたんだ」

「「「「「「！！？」」」」」」

ラルスを除く全員は驚いた。

まあ無理もない。海軍の支部をことごとく潰している人物を、引き入れようというのだ。

「・・・まあ、ラルスのことだ。多分無理な条件を付けすぎて、上層部からの許可は下りなかっただろうからな」

「そうだな。もしそうなったら俺は多分、「天竜人を皆殺しにさせろ！！」と言っていただろうからな」

ラルスは悪役のように、クククッと笑う。

「まあその無理な話が、今回でより無理になっただけだ」

「それで、青雉。本来の目的を話せ。わざわざその程度のことで来た訳じゃ無いだろう？」

かなり真面目な口調で話すラルス。

「ああ。今回来たのはな・・・」

青雉の話は、グランドラインのとある海軍支部の話だった。

「そこの支部をまとめている大佐が、どうやら海賊と結託しているようでな。こちらからもどうにかしたいのだが、確実な証拠が掴めないため、何も手が出せない状態だ」

「成る程・・・わかった、俺達はそこに向かうとしよう。それで報酬の話なんだが・・・」

「わかってる。後で書面にでもして、俺宛てに送ってくれ。後は部下がどうにかする」

「少しは部下のために働いてやれよ。終いにゃ通報すんぞ？」

「海賊が海軍に海兵の通報は可笑しくない？」

「クレア、冷静に突っ込むとこじゃ無いよ・・・」

クレアの天然発言に、エルザが呆れる。

「まあ、これで俺の話は終わりだ。後は頼んだ」

青雉はそう言い残して、再び自転車で海を走っていった。

青雉を見送ってからラルスは言う。

「・・・んじゃ、一応依頼だしな・・・。俺達の”正義”のため、とっとと潰すぞ！」

「「「「「「オウ（うん）！！！」」」」」」

そうしてラルス達一味は、目的地に向かって進み出した。

第3話（後書き）

ご意見、ご感想、良案、提案などございましたら、どうぞよろしくお願いします。

第４話（前書き）

よろしくお願いします。

第４話

グランドライン、とある春島ー

ラルス達、ディオス海賊団は少し離れた沖に居る。

「青雉からの情報によると・・・」

ラルスは青雉に聞いた話を皆に伝える。

「この島に出入りしている海賊団は３つ。そしてそれぞれの船長三人と、海軍支部の大佐他数名が結託しているらしい・・・」

そして、今回の作戦を話しだす。

「ジャックとエルザは海岸沿いで海賊達を攻撃。ガイルとカレンは町中の海賊、及び立ち向かってくる海兵への攻撃、もしくは迎撃。ついでにガイルは負傷した民間人が居たら、そっちを優先してくれ。そしてフィルは民間人の保護をしながら、ガイル達の援護を頼む。んで、最後に俺とクレアは海軍支部への奇襲。作戦は以上だ」

全員を見渡す。

「自分の持ち場が片付いたら、民間人の保護を第一に他の場所の援護を頼む。何か異論のある奴はいるか？」

そこで、カレンとフィルが手を挙げる。

「海兵は気絶でいいの？それとも・・・」

「完全に海賊と繋がっている、と思われる奴以外はなるべく気絶で頼む。青雉からもそう言われてる」

「海賊達の処遇はどうしますか？」

「立ち向かって来る奴は殺しても構わない。逃げようとする奴はどこか一ヶ所に集めておいてくれ。後で意思確認して、使えそうな奴は引き入れる」

そして最後に一言。

「これ以上何もなければ早速始める。それじゃあ・・・散！！」

その言葉を最後に、全員が船から消えた。

第４話（後書き）

感想お待ちしております。

第5話（前書き）

今回から戦闘に入ります！
まずはこの二人。

第5話

ー海岸沿いー

ジャックとエルザは海中で話込んでいる。

「俺は右から、エルザは左からだ。島の裏で落ち合おう」

「りょ～かい！じゃあまた後で」

二人はそこで別れた。

―ジャックＳｉｄｅ―

「海賊海賊っと・・・お、あれか？」

ジャックは海辺に停泊している、帆にドクロが描かれた船を見つけた。

「それじゃあとっとと潰すとするか・・・」

ジャックは海中へと潜っていった。

―海賊船―

そこでは海賊達が、船長を中心に、犯罪計画について話をしていた。

「いいかテメェら！今日も民衆共から金を掻っ攫って来い！払えねぇだのなんだのぬかしやがる奴は徹底的に皆殺しだ！！ギャハハハ！！」

その時、突然船が揺れ出した。

「な、何事だ！？おい、見張り！どうなってやがる！」

「は、はい！どうやら突然、船体に穴が空いたようです」

「んな馬鹿な話があるか！！・・・って、このままじゃ沈むのは確実じゃねぇか！！？野郎共！とっとと島へあがれ！！」

その言葉を皮切りに、海賊達は海へと飛び込む。

が、しかし。

「うわぁ！！！」

「お、おいどうし・・・ぐぁっ！！！！」

「おい！野郎共！！？」

飛び込んだ海賊達が、次々と海中へ消えていった。

岸にあがる頃には、百人近くいた海賊達が、十数人となっていた。

「一体全体、なんだってんだ！！？」

「・・・思ったより残ったな・・・」

「！！？だ、誰だテメェは！？」

「別に名乗る程のモンじゃねぇ・・・。強いて挙げれば・・・」

海賊達の目の前に現れた男・・・魚人が言う。

「テメェらの敵だ！」

「ふ、ふざけんじゃねぇ！！殺っちまえ！！」

海賊達が武器を手にして襲いかかる。

「「「死ねぇ！！！」」」

振り下ろされた剣を、

ガキンッ！！

素手で弾く。

「な、なんだコイツ！？」

「怯んでんじゃねぇ！！とっとと殺るぞ！！」

再び襲い掛かる。が、

「魚人空手・・・千枚瓦正拳！！」

ドンッ！！！

一度に十人を吹き飛ばした。

残りは船長を含め、数人。

「・・・所詮この程度か？」

「な、舐めんじゃねぇ！！！」

そう言って、一体どこから出したのかわからない、多数の銃火器を、縦横無尽に打ち放つ。

「ギャハハハ！！！死ねぇ！！！」

銃弾が魚人へと向かう。

「・・・鉄塊、鱗！」

その言葉の直後、銃弾は全弾被弾する。

「ギャハハハハ！！・・・口ほどにもねぇ！」

勝利を確信したその時、

「・・・笑うにはまだ早えぞ？」

「「「！！？」」」

そこには、無傷の魚人がいた。

「ば、馬鹿な！？確かに全弾命中したはず・・・」

「当たっても効いたかどうかは別だ・・・」

魚人は構える。

「魚人拳法・・・剛羅空拳！！」

拳を突き出した瞬間、海賊達は吹き飛んだ。

「・・・準備運動にもならねぇな・・・」

そう言って魚人・・・ジャックはその場を離れた。

―エルザＳｉｄｅ―

「見～つけた・・・」

エルザは一隻の海賊船の前に居る。

「まだ気付かれて無いみたいだけどどうしよう？やっぱ奇襲？それとも正面突破？」

どうやって乗り込むか悩んでいる。

「・・・よ～し！細かいことは後回し。いざ特攻！！」

そして船に乗り込む。

「うりゃあ！！」

まずマストをへし折る。

「な、なんだ！？・・・っ！！おい、そこのアマァ！！何しやがる！！」

「何って・・・攻撃？」

「ふざけんな！！てめぇ何モンだ！？」

「人に聞くときはまず自分から、って教わんなかったの？」

「チッ！・・・まあいいだろう・・・俺は「私の名前はエルザ！よろしく！！」って言わせろ！！」

発言の邪魔をされて、キレる海賊。

「もう、グダグダとうるさいよ！？」

「てめぇが聞いたんだろうが！？」

「はいはい。御託はいいから、始めるよ？」

「てめぇ、いちいちと・・・！？」

その瞬間、その海賊の首が落ちた。

「「「！！？」」」

「て、てめぇ！！何しやがった！！！？？？」

「何って・・・首を切り落としただけだよ？」

そして構える。

「死にたく無い人は下がってなさい。・・・そして死にたい奴だけかかって来い！！！」

途端に、エルザの雰囲気が変わる。

海賊達は突然の豹変にたじろぐ。

「ぐぅぅ・・・や、野郎共！やっちまえ！！」

そういって、何人かが立ち向かって来る。

「手加減はしないよ・・・秘剣・散突！」

エルザは腰のレイピアを抜き、前に突き出す。

その直後、

ガタガタッ！

向かって来た海賊達は、甲板に転がった。

「な～んだ、つまんないの・・・で、もう居ないの？」

他の奴らは、震えて腰が抜けている。

「じゃあ「おい、小娘。一体何をした？」まだ居たんだ・・・」

船室から一人の男が出て来た。

「ひょっとしてこの船の船長さん？」

「そうだ。だったらどうし・・・」刹那、男の首は床に転がっていた。

「悪いけど船長命令でね。船長さんは絶対に殺らなきゃいけないの」

回りの海賊達は声が出なかった。

自分達の船長が、目の前の女に殺されたことに。

目の前の女が、笑いながら言った言葉に。

戦慄した。

「・・・っと、時間かけすぎたかな？早くジャックと合流しないと・・・」

そのまま立ち去ろうとして、ふと思い出したように振り返る。

「・・・ああ、そうそう。死にたく無い人は、大人しくここに居てね？逃げ出そうなんて考えたらダメだからね？」

笑顔で紡がれた言葉に、海賊達は、恐怖するしかなかった。

「・・・来たか・・・」

「ジャック、お待たせ～。ってか少し早くない！？」

「ああ。意思確認せず、皆殺しだったからな」

「へぇ～。私は一応してきたよ？って言っても、ただ怯えてる人達を脅して置いてきただけだけどね？」

「そうか。まあ海岸沿いは片付いたことだし、町の方に回るか」

「りょ～かい！！」

二人は町へと向かった。

第5話（後書き）

戦闘描写って、難しいですね…

ご意見、ご感想、リクエストなど、お待ちしております。

第6話（前書き）

次はこの三人。

第6話

ー町の入口ー

「んじゃあ、取り合えずラルスの立てた作戦で行くぞ。俺とカレンは町中の海賊と思われる奴らに奇襲をかける。フィルは俺達から少し遅れる感じでついて来てくれ。民間人に怪我をさせるつもりは無いが、万が一ということも有り得るからな、俺と直ぐに代われるように」

「分かりました」

「それじゃあ…暴れるとしますか！」

「……少し落ち着いてな…」

ー町の中ー

「…海賊達、わかり易すぎじゃねぇか？」

いかにも、と言った風貌の輩が、いかにも、といった感じで暴れている。

「探す手間が省けていいんじゃない？」

「いえ。これでは民間人への被害が予想以上に起きてしまうでしょう」

「ああ、そうだな。ま、手っ取り早く片付けるとするか」

「よし！行くよ～…」

ガイルとカレンはそれぞれ武器に手を掛ける。

「「おい！海賊共！！」」

「おい、カブんじゃねぇよ」

「そっちが真似したんじゃん！」

言い争う二人。

「何だコイツら？いきなり現れたと思ったら喧嘩しだしたぞ」

「何だかは知らねぇが、ともかくあいつらもやっちもうぞ！」

「「「「オウ！！」」」」

「って、口喧嘩してる場合じゃねぇ。やるぞ！」

「ガッテンショウチ！」

ガイルとカレンは二手に別れた。

ーガイルｓｉｄｅー

「んじゃあ、とっとと終わらしますか」

腰の刀に手を掛ける。
「時雨蒼燕流・攻式八の型『篠突く羽』」
刀による斬撃を多数繰り出す。
「グハッ！」「ガハッ！」
「バ、バカな…」
たった一撃で、五十人余りが倒れた。
「ひっ！ム、ムリだ…逃げろー！！」
海賊達は逃げ出す。
が、
ガシッ！
「ひっ！？」
「おい、……何処に逃げようってんだ？」
「お、お頭……」
「簡単に逃げようとするやつなんざ、俺の配下にはいらねぇ。ここで死ね」
ザンッ！

「ギャアアア！！！？？？」

「おい」

「ん？」

「テメェ…そいつは仲間じゃねぇのかよ？」

「仲間じゃねぇ。仲間『だった』んだ。俺の配下に、臆病者は必要ねぇ」

「自分の仲間を殺す奴なんざには負けてやれねぇ。テメェはここで殺す！」

「ハン、やってみやがれ！野郎共、巻き込まれたくなきゃ、下がってるかあの女の相手をしてろ」

「「「オ、オス！！」」」

海賊達は一斉に駆け出した。

「一応テメェにも気遣いの心はあるのか？」

「あいつらなんざどうでもいいが……あまりにも人数が減ると今後の航海に響くんでな」

「まあいい。邪魔な奴らが減って動き易くなったが……後でカレンがうるさそうだな…」

「なんだ？遺言はそれでいいのか？とっととくたばれ！」

刀を振りかぶり…

ヒュン！

それを振り下ろすが、

「どこに向かって攻撃してんだ？」

「！？い、いつの間に！！」

「少しは楽しめる相手かと思ったんだが……期待ハズレだな」

「な、なんだと！」

「喚くな。一瞬で片を付けてやる。フンッ！」

ガイルの背中に、一対の蒼い翼が生える。

「時雨蒼燕流・『燕特攻（スコントロ・ディ・ローンディネ）』」

「他愛もない…」

刀を納め、ガイルは走り出す。

ーカレンｓｉｄｅー

「（ちょっとどうなってんのよ？）」

カレンは少しパニクっていた。

「なんでガイルのほうの敵がこっちに来んのよ！？」

カレンは先程から自分の武器…槍で敵を倒し続けている。

別にそれ自体が辛い訳ではないが、倒しても倒しても敵が出て来るので、少々厄介なのだ。

「（も～う、後でガイルには何か奢らせてやるぅ～）」

そう思い至ったカレンは呟く。

「…本気でヤルか…」

その直後、カレンの姿が変わる。

「！？能力者か！」

「しかもその中でも珍しい…」

「動物［ゾオン］系昆虫種［インセクター］！！？」

「もう…終わりだよ？」

カレンは突き進む。

「『女王の進軍（クイーン・オブ・マーチ）』」

カレンは敵を薙ぎ倒して進む。

「こんなもんか」

立ち止まったカレンの後ろに、生きた者は居ない。

「任務完す「カレン、終わったか？」あ～！ガイル！」

「何だよ！俺が居たらおかしいのか？」

「後で何か奢りなさい！」

「何故！？」

「うるさい！とにかく奢りなさい！こっちは疲れてんんのよ！」

「ん？あ～…あいつらか。…わかったよ。軽くなら何か奢ってやるよ」

「わ～い、ヤッター！！それじゃあ、とっとと終わらしせてとっとと帰ろう！」

「はいはい…。フィル、後は頼んだぞ？」

「はい。僕に任せておいて下さい」

「よし、行くぞカレン！」

「アイアイサー！」

「……やれやれ」

ーフィルｓｉｄｅー

「以外と残ってるんですね…」

フィルの目前には、決して少なくない数の海賊。それと、恐らくは結託しているのであろう海兵が数名。

「彼らは野放しに出来ませんね」

そう言って、拳銃を二丁構えて走る。

「取り合えずこいつらの治療をし「そんなことはさせませんよ？」！？だ、誰だ！？」

「それを知るよりも、貴方達が死ぬほうが早いですよ」

そのまま構えた銃の引き金を引く。

バンッバンッ！

銃声は二発。

しかしそこに転がった死体は八体。

「な！？」

「お前、一体何を…」

「何と言われても…僕の能力、としか言えませんね」

「能力者か！？」

「まあ……そういうことです」

そして引き金を引く。

銃声が十発も鳴らないうちに、辺りに生きた人間は居なくなった。

「……さて、町の見回りでもしますか…」フィルはその場を去っていった。

第6話（後書き）

詳しい能力については後ほどキャラクター紹介で。

なんで原作では、昆虫系が出て来ないんでしょうかねぇ？

感想、お待ちしております。

第7話（前書き）

お願いします。

第7話

「それじゃあ、行くとするか。クレア、あんまり無茶はするなよ」

「ラルス君には言われたくないよ」

「…それもそうか。とにかく、行くぞ！」

「了解、船長！」

ー海軍支部ー

ビー！ビー！

突然警報が鳴り響く。

[侵入者あり！侵入者あり！総員、直ちに迎撃せよ！]

「もうバレた！」

「クレア、落ち着け。焦るだけ隙が出来るぞ」

「あ、う、うん…」

「居たぞー！侵入者だー！」
「捕らえろー！」

海兵が現れ、二人を囲む。
「もう逃げ場は無い。おとなしく投降しろ」

「だってよ、クレア。どうするよ？」
「そんな悠長なこと言ってないの！」
「悪ィ悪ィ。じゃ、反撃すっか」
「ＯＫ！…でもその前にラルス君。少し［血］頂戴？」
「わかってるよ。ほら」

ラルスは腕を突き出す。そして、

ガブッ！

「「「「！！！？？？」」」」

クレアはラルスの腕に噛み付いた。

「……ふぅ～、ご馳走様♪さぁてっと…」

クレアは戦闘体制に入る。
今のクレアは、爪が鋭く伸び、牙が生えている。

「能力者か！」

「ビ、ビビるな！総員攻撃！」

海兵達が構えた銃を撃つ。

「ハ、ハン。い、意外とたいしたこと…！？」

銃弾は命中することなく、全弾、塵となり消えていった。

「…お前達に一つ聞く。ここの大佐だったか？のしていることに疑念を持つ者は、今すぐに武器を納めて下がれ」

目の前の海兵は百人強。その中で武器を下ろしたのは僅かに六人。

「…少ねぇな。おまえたちの正義はそんなものなのか？」

「やっぱり海軍ていうのは名ばかり。正義なんてどこにもない」

「う、うるせぇ！大体何なんだテメェらは！何しに来やがった！」

「何しに来やがったって言われてもな…［天帝］が来た、とでも言っておこうか」

「な！？天帝だと！？」

「お、俺達じゃ勝てるわけねぇ！逃げろ…」

最後まで言い切る前に、海兵は床へと倒れた。

「テメェらに逃げ場は無ぇ。さっき下がった六人以外はここで仕留める…」

「待って、ラルス君。ここは私がやるから、ラルス君は主犯の大佐達の所へ！」

「ああ、わかった。ここは任せたぞ、クレア」

「もちろん！」

クレアを残してラルスは走り去った。

ークレアｓｉｄｅー

「よし、早く片付けてラルス君のとこに行かなきゃ！」

クレアは気合いを入れる。

「［天帝］と一緒に居る女で、血を吸うってことは…」

「間違い無ぇ！こいつは［黒姫］だ！」

「気付いたところで、もう遅いよ。剃！」

クレアは高速で動く。

「血爪斬！」

クレアの紅みを帯びた爪が、海兵を切り裂く。

そしてそれを繰り返し、一人一人、確実に葬って行く。

しかし、

「（ちょっと騒がしかったかな？人が集まって来ちゃった…）」

騒ぎを聞き付けた海兵たちの増援がやってきた。

「（しょうがない。ちょっと疲れるけど…）」

クレアは大きく息を吸い込み、

「劣化版！［大気の息吹（エアー・ド・ブレス）］！」

思い切り吐き出す。

「グアアアアアッ！！」

集束された空気を受けて、海兵は全て倒れた。

「ふぅ、全部終わったケド…」

地べたに座り込む。

「疲れたー！！！！！！」

一声叫んだ。

ーラルスｓｉｄｅー

「邪魔だー！！」

「うおっ！」「ゲフッ！」

ラルスは立ち向かってくる海兵を吹き飛ばしながら進む。

「チッ、邪魔なんだよ！」

掌に空気を集め、

「［大気の解放（エアー・ド・リリース）］！」

一気に解き放つ。

その衝撃で、正面の海兵は全て吹き飛ばされた。

そして再び走り出した。

「ここだな…」

ラルスは［支部長室］と書かれた部屋の扉の前に居る。

「とっととぶち破る！鉄塊・崩！」

ラルスは扉を殴って開けた。

「！？な、何奴…」

「あんたがここの大佐か？」

「そ、そうだ。貴様は何者だ？扉を殴って開けるなど、礼儀を知らんようだな」

「テメェに礼儀なんざ必要無ぇ…海賊から賄賂を受け取る海兵なんかにはな」

「！？な、なぜそれを！？貴様、一体…」

「今から死ぬ奴には、知る必要の無いことだ」

ラルスは大きく息を吸う。

「［大気の息吹（エアー・ド・ブレス）］！」

「ギャアアアア！！！！！！」

気弾によって切り刻まれ、大佐は絶命した。

「…テメェの［正義］は、生かしちゃおけねぇ…」

そう言った後、ラルスは電話をかける。

「もしもし、俺だ。実は…」

ー海軍支部の外ー

「…クレア、無茶はするなと言っただろう？」

「いや、あまりにも人数が多かったもんで、つい…」

外へ出る途中、ラルスは疲れて動けないクレアを発見し、そのクレアをおぶって外に出て来た。「だから、俺の力を使うときはもう少し来を付けろ！」

「ふぁ～い、気を付けますぅ～…」

「全くもう…」

二人が話していると、

「おおーい！」

「「ん？」」

声のしたほうを見ると、ジャックとエルザがこちらへ向かって来る。

「終わったみてぇだな…」
「ああ、まあな」
「二人もお疲れ！」
「クレアはもっと疲れてるみたいね」

そしてさらにそこに、

「あ～！クレアずるい～！」
「カレン、少しは落ち着けって」
「そうですよ。いくらなんでも暴れすぎです」
「だって～……クレア、おんぶズルい！」
ガイル、カレン、フィルもやって来た。
「クレア、今すぐ下りて！」
「ヤだ！絶対下りない！」
「「うぅ～…」」
クレアとカレンが睨み合う。
そんな二人に耐え兼ねたラルスは、

「二人とも、いい加減にしろ！」

ビシッ！

「「痛っ！」」

二人にデコピンを喰らわす。

「落ち着けって。カレン、クレアはさっき無茶したばっかで、動けないんだ。少し多めに見てやってくれな？」

そう言ってクレアをあやすように、頭を撫でる。

「えへへ～♪」

「な！？ず、ずるい！ラルス君、私も…」

「じゃあ下ろすぞ？」

「ダメー！！！！！」

「「「「アハハハハッ！！！！」」」」

こうして、彼らの仕事は終わった。

第7話（後書き）

今後の展開どうしよう…

何かアイディアがあったらお願いします。

第8話（前書き）

オリキャラ登場！

第8話

ー島の港ー

「…ようやく来たか」

ラルス達は、港である人物を待っている。

そしてその人物が、海軍の軍艦から降りて来た。

「お久しぶりです。ラルスさん」

「かしこまるのはやめろって。いい加減、体がむず痒い」

「いえ、そういう訳には…貴方は俺の”恩人”ですから…」

「別に気にしなくていいんだぞ？俺が好きでやったことだし」

「いえ、ですが…」

「っだ～、もう！！いつまでも引きずってうじうじしてんじゃねぇよ、フォルス」

今ラルスが話しているのは、海軍本部少将であり、この件の依頼者、青雉の副官であるフォルス。

今、この件の後始末について話し合っている最中だ。

「…すぐに次の支部長を連れて来るってのは、少し厳しいものがあります」

「だろうな。海軍もこんなことばっかじゃ、人手不足でしょうがねぇ」

海賊はいくらでも増えつづけるが、それに対抗出来る海兵は、日に日に減っていってる。また、ここの支部長のように、正義を失った者も少なからず居る。

そんな状況で、簡単に人を回せるわけがない。

「心配すんな、フォルス。んなことだろうと思って、ウチの傘下の奴に、ここに来るよう連絡しておいた」

「本当ですか？助かります」

「気にすんな。やり過ぎたお詫びだ」

とかなんとか話している内に、そいつはやって来た。

「ラルス船長、只今到着しました」

「ああ。済まないな、急に呼び出したりして」

「いえ。船長のご指示とあらば」

「ひょっとして”稲妻のバルト”さんですか？」

「ええ、そうです」

「ラルスさん、大分極悪人を呼びましたね」

「大丈夫。俺からの命令には、気持ち悪いくらい忠実だから」

「船長、気持ち悪いは余計です」

「すまねぇ。それよりバルト、やることは分かってるな？」

「はい、次の支部長が来るまでの島の防衛、及び的の撃破。ですよね？」

「ああ、その通りだ。それと別件でもう一つ。この島で好き勝手やってた海賊達。何人か生きてる奴をどうするか、だ。もし言うことを聞くような奴だったら、引き入れるなりなんなり、好きにしろ」

「了解です、船長」

バルトは海賊達の所へと向かった。

「じゃ、俺達も行くとするか」

「そうだね」

「腹も減ったしな…。クレア、飯頼むぞ」

「まっかせといて～。今日は特に張り切っちゃうから」

「そりゃあ楽しみだ」

「皆さん、何から何まで、本当にありがとうございました」

「いいんだよフォルス、気にすんな」

「しかし…」

「そんな律儀に礼を言う暇があるなら、もっと修行して強くなれ。トップに立って海軍を変えるんだろ？頑張れよ」

「はい！」

「じゃ、青雉にもよろしくな～」

「「バイバ～イ」」

「では、また」

フォルスの敬礼に見送られ、ラルス達、ディオス海賊団は海へと出て行った。

第8話（後書き）

今後が全く思いつかない……

何か良い案、ありませんかね？

第9話（前書き）

今回はまさかのアノ人の登場。

まさか青雉の次の原作キャラがこの人とは……

では、どうぞ。

第9話

「さあて…どうすっかな？」
ラルスは今あることを考えていた。
今回の件での報酬についてである。
「どんなものにしようかねぇ……」
ラルスが椅子の背もたれに体を預けた時、その軽い振動で、棚の上のものが落下してきた。
それがラルスにぶつかる。
「痛っ！」
突然のことすぎて空気化もできず、モロに衝撃を受ける。
「ったく、なんだよこれは…」
そう呟いて拾いあげる。
落ちていたのは、先日手に入れた”悪魔の実”だった。

「こいつは確か……！そうだ…」

何かを思い付いたラルスは、青雉に連絡するために手紙を書きはじめた。

ーディオス海賊団船内ー

「よう」

「どんな登り方してんだよ……」

「今更気にするな」

そこにやって来たのは大将、青雉。海を自転車で渡ってきて、そのまま船体を垂直に登ってきたのである。

「それより、”例の件”はどうなった？」

「大丈夫だ。ちゃんと連れてきてる」

青雉がそういうと、西側（船の左）の海に、海軍の軍艦が見えた。

「なあ、なんでアンタは軍艦で来ないんだ？めんどくさがりのアンタなら船で来そうなものを…」

「単純な話だ。軍艦よりも自転車が好きなだけだ」

「あ、そう……」

くだらない会話をしていると、軍艦が隣についた。

「ラルスさんっ！」

「よぉ、フォルス。また会ったな」

「はい！」

ラルスがフォルスと話していると、

「ラルス様～！！！」

「ぶおっ！！？」

一人の海兵が飛び付いて来た。

「おい、ミーシャ！ひっつくんじゃねぇ！」

「だって～……久しぶりなんですもの！！」

抱き着いて来たのは、海軍少将のミーシャ。フォルス同様にラルスを慕っている。

少々度が過ぎるが……

「ミーシャ、とにかく離れてくれ。このままじゃ話が進まない…」

「え～、嫌で「ミーシャ、迷惑をかけるな」ぶぅ～…」

フォルスがミーシャをラルスから引き離す。

実はこの二人、兄妹なのである。

「サンキューな、フォルス」

「いえ、迷惑をかけたのはこちらですから」

「気にすんな、貰っとけ。それよりも青雉、あの人は……」

「私ならここじゃよ」

そこにいたのは、一人の男だった。

「お会い出来て光栄です。”Ｄｒ．ベガパンク”」

「いやいや、こちらこそ…」

ラルスの前に居るのは、世界一にして海軍の科学者、”Ｄｒ．ベガパンク”。

「よくぞおいでくださいました」

「いや、かの有名な天帝に話したいと言って貰えるとはね」

ベガパンクがここに居る理由。それはラルスが青雉への報酬に”Ｄｒ．ベガパンクと話がしたい”と言ったからである。

「いえ、まさか直接会えるとは思ってもいなかったもので」

「なに、私も君に興味があってね」

「光栄です、ドクター。それよりもまず、お聞きしたいことがあるのですが…」

「なんだね？」

「これなんですが…」

そういってラルスが持ち出したのは、先日の悪魔の実。

「悪魔の実かね？」

「ええ、そうです。これは動物系幻獣種、”トリトリの実・モデル鳳凰（ホウオウ）”です」

「これはまた珍しいものを…」

「それでですね、実はこれを……して……を……出来るようにしたいのですが可能でしょうか？」

「ふむ、なるほどね……。もちろん可能だ。少し準備が要るがね」

「それをやって頂きたいのですが…」

「わかった、引き受けよう」

「ありがとうございます。それで、報酬のほうは…」

「別に払わなくて構わんよ」

「！？ですがそれでは…」

「いや、いい。君に会えた、それだけで十分さ」

「……本当にありがとうございます」

「いやいや。では準備があるので、これで失礼させてもらうよ」

「はい。ではまた後日」

そうしてベガパンクを含め、海軍一同は帰っていった。

ー数日後ー

「よし、これで終わったぞ」

「本当ですか！？ありがとうございました！」

「いや、こっちも良いものを見させてもらった。大分大切に扱われているみたいだね」

「ドクターにそう言って頂けて、とても光栄です」

「そうかい。では、メンテナンスは今まで通りで構わないから。では私は帰るとするか」

「ご苦労様でした。またいつかお会いしましょう」

「ああ、楽しみにしているよ」

ベガパンクはラルス達の船を出ていった。

「で？どう感じた？」

軍艦の上で、青雉がベガパンクに尋ねる。

「あれほどの賞金がかかるような男には見えんかった。悪人にはな。それにあやつの目……とても澄んでおった。あれほどの目を持ったものは、海軍でもそうは居ない。悪を憎み、平和を望んでいるのが、それだけで伝わって来た」

ベガパンクは、さきほどまで隣に居た男、ラルスについての感想を述べていた。

「それに、お前と違って礼儀正しい奴だった。お前と違ってな」

「ま、あいつはもともと王族だしな。礼儀正しいのは当然だ」

「そうか、道理で…。それにあの若さであの落ち着きよう、流石”四皇”に数えられるだけはある」

「正直、敵じゃなくてよかったと思ってるよ、海賊でも。ただ、最近は他の大将二人が、討ち取ろうと必死だけどな…」

「……ああいう奴に、世界のトップに居てほしいものだな」

その呟きは、虚空へと吸い込まれた。

第9話（後書き）

今作品でドクターは、どちらかといえば善人という感じです。

この人はまた後々出て来ます。

それより、フォルスとミーシャはどういう風にもっていけばいいですかね？

能力や戦い方などの意見や、原作キャラとの絡ませ方などのリクエストなど、どしどしお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3733n/

ONE PIECE ～正義のために～

2010年10月18日19時51分発行